
RAIN

蜚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RAIN

【Nコード】

N3342A

【作者名】

蛍

【あらすじ】

格好良い男子生徒でつくられる御三家。そんな御三家の一人、紺野とは同じ委員会。またもう一人、諸星とも接点を持ってしまう主人公、東条遥。誰もが羨む位置にいるのに遥は……。だんだんずれていく歯車は複雑な三角関係の恋愛へ。

***1 始動 s i d e h a r u k a (前書き)**

この小説は以前別の場でも書いていました。またこの場をお借りして書き進めたいと思っています。
目を通していただけると幸いです。

***1 始動 side haruka**

恋をして、愛を知る。
それはどんな感情なのかな。

「紺野君・・・好きです」

・・・

「ごめん」

・・・

気まずい・・・

放課後の図書室。

私の前には先生に並べるようにいわれた
新札本約30冊と

今にも泣き出しそうな一人の女の子と

面倒臭そうに頭を掻く一人の少年

・・・気まずい

私が部屋を出て行こうかな、

なんて考えた時、泣きそうな顔した女の子は急に走って出ていった。

すごい・・・

涙でせつかく可愛い顔がぐしゃぐしゃだった。

「あー東条、消化悪いもん見せてごめんなー」

「・・・別にいいけど・・・酷いね。紺野は」

「そう？だって俺あの子と付き合う気ないし」

「・・・はあ・・・それより図書委員ならちゃんと本並べてよ！」

「へーい」

仕事にうつる私達。

関係は只の図書委員。

そして目の前にいる男が

カッコイイ人だけで作られる御三家の内の一人

紺野尚哉

軽い男。

私にとってそれくらいしか彼について思うことはない
カッコイイだけじゃ好きになんてなれない

「あー終わったー！」

「私も終わった！」

少し暗い教室に二人

「なあ、東条」

「ん？」

「誰も居ないし・・・キスでもする？」

「はあ?!?!」

思いっきり彼の膝を蹴り込んだ

「いってー!!!! 冗談だつてのにー!!」

「紺野が言うど冗談に聞こえない」

「なんだよそれ!!」

「だって紺野軽いもん。空気より軽いよ絶対」

「俺そんな痩せてねえって!!」

「・・・意味違うし、馬鹿」

「んだと?!」

お互い笑いあって
それが楽しかった

純粹に
私にとって
は。

どんどん青春という

齒車にまわされていくなんて知らなかった。

知っ
て
い
て
も
・
・
・
き
っ
と
止
め
ら
れ
な
か
っ
た
だ
ら
う
け
ど
。

*2 手紙 side haruka

気持ちが変わらない保障なんて無いのに
どうして皆はそんなに笑っているの？

学校について下駄箱。

そして私はいつもため息を付く。

下駄箱には手紙がぎっしり。

全部綺麗な可愛いレターセットでお決まりにハートのシール。
言っておきますが残念ながら私宛じゃありません。

全て私の靴箱の隣の人に向けて書いたのに間違えて
私のところに入れられてしまった手紙だらけ。

「間違えんってーの・・・」

1つ1つ取り出す

やっぱり全て隣の人宛てだ。

全ての手紙にピンクやらラメ入りのペンで書かれた名前は

諸星 刹

生徒会長で御三家のうちのまた一人

ちなみに隣のクラスで話したことはあまりない。

彼の下駄箱に入れようとするとう上から低い声が降ってきた。

「あ？ お前も俺に手紙？」

諸星だ・・・

しかも違う・・・

私がゆっくり顔を上げるとそこには
面倒くせえな、みたいな顔をした彼。

「全然違います。貴方宛のが私のとこにまで・・・」

私が迷惑そうに彼に手紙を差し出すと

「あっそう？じゃあ捨てとけよ」

「へ？」

なんだか問題発言をさらっといった彼。

・・・意味わかんない・・・。

「燃えるゴミだからな、燃えないとこに出すなよ」

「なっ・・・！」

なにー?! あいつ!!? なんなの??!

せっかく迷惑にも私の靴箱に入っていたけど

女の子が一生懸命書いたであろう手紙読まないわけ？

普通だったらどんな人からでも

ラブレターなんて貰えたら嬉しいでしょうがよ。
おまけに命令口調ですか・・・。

私が一人唾然としていると「聞いてんのか」みたいな
顔して足早に階段を上っていく彼。

そんな彼はあの御三家。

・・・格好良いはずのあの彼。

・・・あーはいはい

私は彼の下駄箱に持っていた手紙を全て突っ込んだ
いらだって自分の上履きを取り出すとまだ奥から何通か
はらはらと手紙が落ちていった

かっこいい人はなんでいつも性格が悪いんだろう

*3 空間 side haruka

一目惚れ。

そんなの信じない。

見た目が好きで惹かれて。

一番ギャップで困るのは自分なのに。

「「きゃーっ!!」「」」

必ずいつもの甲高い声

彼が・・・ううん、彼達が何か行動するたびに
起きる叫び声。

耳が壊れるってーの!

「「諸星くん」「」」

「「紺野くん大好きー」「」」

今日の校庭は人で溢れかえっている。

なぜなら御三家のうち2人が外で

サッカーのパスをして遊んでいるから

「ほい! 諸星!」

「ああ・・・っと！」

「「「きゃ~~~~~」」」

・・・呆れる。

なんでそんなに好きになれるの？

二人がどんな性格だかもしれないで

小さなため息をつきながら図書室の窓から下を見ていると
上を急に見上げた紺野と目が合った。

「?!」

「あー!! 東条ー!! ごめん、委員サボっちったー」

とたんに私は隠れる。

下からは女子の悲鳴。というより断末魔。

紺野の馬鹿・・・目付けられたらどうしてくれるのよ

「おーいー? 東条ー?? 出て来ーい」

まだ呼んでる

もう私の名前呼ばないでよ。

「東条って?」

やけに透き通るような声。

この声、諸星か・・・。

「ああ、クラスメイト。んで同じ委員」

「・・・ふーん」

「あー！！！何？！諸星気になんの？」

「はつまさか！どこの馬の骨だよ、それ」

また下から今度はむかつく会話が聞こえてきた。

私だってあんたらの事なんてこれっぽっちも興味ないですからっ！

このまま上から辞書でも落としてやりたいくらいですけど。

それでもそれはいけないことですから。

じわじわとくる怒りを飲み込んで飲み込んで。

私は一人図書室で目を閉じて怒りを静める。

しばらくしてまた女子の歓声。

こっそり頭を出すとまたサッカーに没頭している二人。

「・・・ばーか！！！」

こっそり背中につぶやいて舌を出してやった。

まだ完全に収まってない怒りはどこか空しくて。

一人の空間にはもっと空しくて。

外から全く変わらない信じられない位の高さで聞こえてくる歓声に
少し可笑しくなって笑ってしまった。

***4 欠伸 side haruka**

告白。

慣れるの良いけど

見るのに慣れるなんて寂しいもんだね

今日も涙を見た。

いつからだろう、人の涙を見ても

心が揺れなくなったのは。

図書委員の机にひじを付いて

暇だから読み始めた意外と面白い本をめくる。

目の前には目を瞑ってあくびをする男。

さっきまたあのへらへら顔から出た

きつい「ごめん」の一言。

まだ私の耳にも残ってる。

振られた直前私を少し恨めしそうに見て

泣きながら走っていった女の子。

よく考えれば私は相当良い立場なのかもしれない
御三家のあの紺野と週に3日同じ当番だなんて

でもそれは私に恋愛感情がないかぎり
別に嬉しいとかそんなことはない。

ただ楽そうだから選んだ委員会で私は苦勞している。

「はぁー・・・」

「あ、東条。ため息つくとき幸せ逃げるんだって」

「・・・はいはい」

目の前の君のせいで
もう幸せなんて十分減りました。

「・・・今日は紺野サボらなかったね」

「ああ、東条が一人だと可哀想だから」

「あっそうですか」

「そうですよ」

つかめない。

なんで心にも思っていないことすらすらと言えるんだろう。

こんなんだから勘違いする女子が増えるんだっつーの。

「あ、そうだ東条。諸星がお前のこと聞いてたよ」

「は？」

「可愛って」

「嘘。こないだの会話ならちゃんと聞こえてました。私を馬の骨つて」

「ははは、ばれたー？」

目の前にはちよつと間違えば女子なら誰でも好きになっちゃいそうな男。

私にとっては只の小学校からのクラスメイト。

こんな風に笑う彼を他の女子が見たらどうするんだろう。

私は、「キヤー」なんて叫べない。

そんな高い声でない。

目の前の見つめていたら欠伸がでた。

*5 青空 side haruka

最近天気がやけに良くて
何もない放課後といったらあそこに行くしかないでしょ。

背中をコンクリートの熱が温める。

ちょっと熱いけど心地良い。

真上には写真にでもおさめたい青空と
緩やかな風。

下からは下校する生徒たちの声。
やっぱ学校といったら屋上だね。
太陽がまぶしくて目を瞑る。

目を瞑っても瞼の裏に太陽の光が差して
ちよっとさすがに日差しが強いと思った。

手で顔を覆ってまた目を瞑ると
微かに人の気配。

「何やってる」

いきなり聞こえた低い声に驚いて上半身を起こすと生徒会長という金バッジを襟元で反射させて眉間にしわを寄せた諸星が立っていた。

「・・・なんでここに・・・？」

「いつもは鍵がかかっているのに今日は扉が少し開いていたから」

「あーごめん・・・勝手に入っちゃった」

「困るんだよ、何かあったら会長の俺の責任だ」

「何かって・・・私何もしないよ」

「ごちゃごちゃ言うな」

何コイツ。ちょっといくらなんでも偉そうじゃない？

生徒会長ってバッジが反射してさっきから私の目に当たってるんですけど。

眩しいのとイライラで私も眉間にしわを寄せる。するともつと顔に皺と影を刻み込んですぐ私を睨み返す君。

しばらく睨み合いが続いて

「ごめん、帰ればいいんでしょ」

私が折れた。

もう昼寝なんて気分じゃない。気分が悪い。

彼の横を通り過ぎる時。
彼が私の腕を掴んだ。

「名前は？」

「へ？」

「名前を言え」

整った顔の中のきらきらした目に思わず
顔が染まる。

「な・・んで」

「いいから早く言え」

「・・・3年B組、東条・・・遥」

「東条、遥・・・」

「じゃあ帰ります・・・っ」

赤い顔を隠すために走って出た私
胸が大きく鳴って止まない。

「最悪・・・っなんであんな顔だけのやつに・・・！」

悔しくて唇をかむ。でも・・・
名前を聞かれたこと

少しドキドキした。

翌日

渡された手紙には生徒会長より書かれた私宛の必要時以外屋上立ち入り禁止書。そこには整った字で書かれた私の名前。ああ、なんだ。これだけのため・・・。少しドキドキしてしまった私にまたため息をついてしまった。

***5 青空 side haruka (後書き)**

最近受験の為更新遅れております。
申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3342a/>

RAIN

2010年10月22日00時56分発行